

## ヤマネ *Glirulus japonicus* の休眠場所の選択

玉木恵理香（筑波大・生命環境）、門脇正史（筑波大・農技セ）

落合菜知香（筑波大・生物資源）、杉山昌典（筑波大・農技セ）

ヤマネ *Glirulus japonicus* (国の天然記念物, 準絶滅危惧種) は森林に依存した種であるため、開発による森林の減少・分断化の影響を受けていることが懸念される。ヤマネの生息地保全が必要であるが、夜行性で発見・捕獲が容易でないため野外での生態情報が少ない。ヤマネは主に樹上で採餌・日内休眠・繁殖を行うことが知られる。日内休眠に同じ場所を連続して利用することが少ないので、日内休眠場所が空間利用の上で重要だと考えられる。しかし、日内休眠場所周辺環境については十分な知見が得られていない。本研究では特に樹木に着目してヤマネの日中の休眠場所の選択性を調査した。

本調査は長野県にある筑波大学農林技術センター川上演習林（約 190ha）で行った。人工林（カラマツ等）が約 7 割、天然林が 3 割で構成されている。調査は 2010 年 6 月～10 月と 2011 年 6 月～11 月に行った。林道・歩道沿いに設置した巣箱（447 個）で捕獲し、個体識別用標識タグを取り付けて小型発信機（約 0.37g）を装着した後に捕獲した場所へ放獣した。八木アンテナと受信機でヤマネの日中の休眠場所を特定して、その特徴と位置を記録した。休眠場所を中心とする周囲樹木（≦半径 10m 円内）の胸高直径（DBH≧5cm）、樹種、状態（生木または枯死木）、樹洞数を周辺環境の項目として調べた。そしてヤマネが利用した樹木と利用しなかった周囲樹木の上記項目（DBH、針葉樹・広葉樹の割合、生木・枯死木の割合、樹洞の保有率）を人工林と天然林ごとに比較した。

2010 年に 28 個体、2011 年に 24 個体のヤマネを捕獲した。2 年間で 22 個体のヤマネに発信機を取り付け、追跡できた 13 個体は延べ 52 ヶ所を利用していった（表 1）。人工林と天然林ともにヤマネは樹上と巣箱をよく利用しており、地面の利用はほとんど見られなかった。ヤマネの休眠場所としての利用と、DBH、樹洞の保有率にはそれぞれ関係があり、太い木と樹洞のある木がより利用されていた（DBH：人工林と天然林  $P < 0.01$ 、樹洞：人工林  $P < 0.0001$ 、天然林  $P = 0.04$ ）。しかし針葉樹と広葉樹の割合、生木と枯死木の割合には関係性がみられなかった。巣箱の存在も人工の樹洞とみなすと、樹洞の存在がヤマネの休眠する樹木の選択に関係していると考えられる。

表 1 ヤマネの日内休眠場所

	人工林				天然林				
	樹上 (≧2m)	樹上 (<2m)	根元	巣箱	樹上 (≧2m)	樹上 (<2m)	根元	丸太	巣箱
2010 オス(2)	9	1	0	3	1	0	0	0	0
メス(4)	4	0	1	1	5	1	0	0	2
2011 オス(4)	3	1	0	4	3	0	1	0	1
メス(3)	3	0	0	4	2	0	0	1	1
合計(13)	19	2	1	12	11	1	1	1	4